埼玉大学紀要　教育学部、63(2)：39-48（2014）

シーズン・スポーツBの野外教育としての意義について

松　本　　真　　埼玉大学教育学部保健体育講座

キーワード：野外教育　スキー

1．はじめに

埼玉大学教育学部保健体育専修では、シーズン・スポーツＢというスキー実習の授業を実施している。この授業の基本的な目的は、最低限度のスキー技術の習得を主として、雪山を体験するという野外教育的な面を付加的なものとしている。

将来、小学校教員、中学、高等学校の保健体育の教員になった時、冬期の実習、修学旅行、林間学校等で、雪上の実習を行い、スキーをする事がある。最近では、教員自身がスキーを直接、教えることは少なく、単に引率をしていくことも多い。しかし、特に保健体育教員は、このような実習に積極的に関わる必然性が出てくる。このような背景を基に、実習でスキーを行っている。

ところで、スキー実習は、先にも触れたように、冬山にいってスキー技術を習得することが、主目的であるが、一方で野外教育という側面も持っている。この部分は、他の体育実技種目とは、大きく異なる点です。そこで、シーズン・スポーツＢ（スキー実習）の野外教育という側面に目をむけて、これまで実施してきたシーズン・スポーツＢの検証を行うとともに、今後の方策の指針とすることを目的にする。

2．シーズン・スポーツＢの概要について

まずは、シーズン・スポーツＢがどのような授業であるのかを、経緯を含めながら、概観する。

平成23年２月より、シーズン・スポーツＢは、それまで主担当をしていた教員の退職に伴い、筆者に変わった。それに伴い、いくつかの変更点があった。大きな変更点は、それまで野外教育の専門家が主担当であったが、野外の専門外の教員が担当することになったことである。それによってこれまで、スキー、スノーボードの選択制であった授業をスキーのみにした。スノーボードを教えられるスタッフが少なく、両方を行うことが困難になったことも一因である。

しかし、他にも大きな理由がある。受講生の多くは、将来、小学校の教員、中学校、高等学校の保健体育の教員になる。現在の学校では、合宿形式でスノー･スポーツを体験させることがある。しかし、安全上の理由等から、実技を教えるのは現地のインストラクターに任せてしまい、教員が指導に携わることはほとんどない。そのかわり、見回りなどの補助業務が多く、かえって、教員の機動力を必要とする。そのため、スノー・スポーツの中でもスキーとスノーボードでは、どちらの方がこの業務が行いやすいのかと考えると、やはり、スキーであると考える。この理由は、スキーの歴史的な背景に求めることができる。そもそも、スキーは、「紀元前2500年頃から、積雪期の交通手段や狩猟のための移動道具として考案され広く使われていたと推定」（スキー連盟　2014　p.16.）されるとしている。つまり、スポーツを楽しむための道具というよりは、雪上でいかに効

率よく移動をするのかということが原点であることが明らかである。

さらに、スキーのことをよく知る人なら、若干の疑問が出てくる。かつて、人類が雪上で移動していたのは、現在のノルディックスキーやテレマークスキーのことであり、実習で行うアルペンスキーとは異なるのではという見解もある。しかし、ノルディックスキーやテレマークスキーは、スキーとブーツがつま先で固定され、かかとが自由になっているため、歩くことはやりやすいが、斜面を滑り降りることに関しては、かかとが固定されているアルペンスキーと比較して難しくなる。つまり、かかとが固定されたアルペンスキーの方が斜面の多いゲレンデという限定された空間では、極めて高い機動力を発揮すると言えるのである。つまり、アルペンスキーといえども極めて高い機動力を発揮する。このような理由から、雪山での実習は、スキーだけにした。

これに伴って、これまでシーズン・スポーツＢを実施していたげゲレンデも変更することにした。スキーだけにしたということで、全くの初心者が減ることが予想された。一時期のスキーブームは去ったとはいえ、学校でスキーを体験させる所は少なくない。そのためスキー初心者は多くても半数ぐらいと予想された。実際に、筆者がシーズン・スポーツＢを担当してからの受講生のスキー滑走日数を表にした。なお、表中１～３日も抽出したのは、シーズン・スポーツＢが四日間の実習でどこでも滑れるようにということを目標にしているため、それ以下の滑走日数も見られるようにということである。

シーズン・スポーツＢの過去四年の受講生の滑走日数

	全体の人数	滑走日数０日	滑走日数１～３日	滑走日数４日以上
2014	32	11	3	18
2013	31	7	4	20
2012	30	3	5	22
2011	44	6	11	28

（表内の単位は人）

この表でも解る通り、最も初心者の人数が多い年で、11名で全体の約34％であり、少ない割合と言える。そこで、スキーの初級者以上の講習が主となり、技術講習だけを考えるなら、ゲレンデを特別に厳選する必要はない。しかし、スキーの魅力に、ツアー的に広範囲を回るという面がある。これは、前述のように、スキーが雪上を歩くことから始まったことと関連する。そこで、これまでのゲレンデより、バラエティに富み、広大な規模を持つゲレンデが必要であると考えた。また、授業時間を確保する関係もあって、昼間の講習だけでなく、ナイター実施する必要があった。ナイター営業をしているゲレンデは、数多くあるが昼間の営業とナイター営業の間に整地してくれるゲンレでは少ない。これらの条件をクリアできるのは志賀高原スキー場であった。

志賀高原スキー場は、標高1340ｍから2307ｍに広がる大小のスキー場を、52基のリフト、ゴンドラ、さらに各スキー場を結ぶシャトルバスで機能的に連結した一大スキーリゾートです。特に、宿泊先がある中央部は、1998年の長野五輪のGSコースが作られたところで、上級者から初心者コースまでそろっている。そして、元々大小のスキー場をつなげて作ったという経緯からもツアー的な移動を楽しむ事ができ、スキーの魅力を楽しむにうってつけのスキー場である。

以上が、平成23年２月からシーズン・スポーツＢをいくつか若干変更した点と、その理由である。

３．野外教育に対する見解とシーズン・スポーツＢ

シーズン・スポーツＢを概観すると保健体育専修の実技科目と同じようにスキー技術の習得という側面が中心にくることは確かであるが、一方で、雪山を体験する、ゲレンデをツアー的に回るという側面は、単なる技術講習ではなく、野外教育という面に触れることが可能となることが予想され、期待される。そこで、平成８年７月24日に実施された「青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議」における、「青少年の野外教育の充実について」（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）を検証し、野外教育がどのように捉えられているのかを検討することで、シーズン・スポーツＢを単なるスキー技術習得とは違う可能性について目を向けてみる。（本節で「　」内は、この報告からの引用である）

3.1　野外教育とは

先の会議の報告で、野外教育の基本的な概念について「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と定義している。そして、自然体験活動の具体例として、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動等を含んだ総合的な活動などがあるとしている。

また、その目標として、「自然に対する興味・関心の情勢、自然と人間の望ましい在り方の理解、自然体験活動の楽しさや技術の習得、自主性、協調性、社会性、創造力、忍耐力の育成など」と多様な目標を考えられるとしている。つまり、「個々の野外教育が、どのような教育目標を持っているかは、社会の要請、組織や指導者の理念に寄って大きく異なり、対象者の年齢、経験、人間、関心、さらには、実施場所、活動内容等によっても左右される」としていて、普遍的な目標はない、求めないとしている。

これは、野外教育といった時に、野外で行う様々な事象、文化が対象となっているため、その目標も必然として、多様になる。そのため、野外教育とは何と問われるとかなり厳しいものがある。しかし、原理論的な考察の有無は別にして、少なくとも現代社会において、野外教育は求められている面がある。次に、この報告では「今なぜ野外教育か」ということに触れられている。

平成８年７月の第15期中央教育審議会において、「いきる力」に着目されている。この「いきる力」は、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質能力であり、また、自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であり、そして、また、たくましく生きていくための健康や体力である」としている。そして、「いきる力」育成のために、青少年の生活体験・自然体験の機会の増加を求めている。つまり、学習指導要領の中で、昨今何かと話題になっている「いきる力」にとって、野外教育が果たす役割を大いに認めていることである。例えば、野外教育の具体的事例でも挙げられているキャンプ、ハイキング等は、先に挙げた「いきる力」の「主体的に判断し、行動し」、「他人とともに協調」等ということを達成するために非常に有効であると昔から言われている。「いきる力」について焦点が充てられた経緯を考えると、野外教育が社会から教育、特に学校教育に求められている要素に合致すると考えられる。報告においても、「青少年にとっての野外教育は、自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情を培うなど、自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和して生きていくことの大切さを理解させる機会を与える ～ さらに、自

然の中での組織的な活動は、きまりや規律を守ること、協力することの大切さや、自ら実践し想像する態度を学ぶなど、体験活動を通じた総合的学習の機会を提供」するとして、有効性を指摘している。

そして、報告では、野外教育に期待される成果として、次の点が挙げられている。

ア　感性や知的好奇心を育む
イ　自然の理解を深める
ウ　創造性や向上心、物を大切にする心を育てる
エ　生きぬくための力を育てる
オ　自主性や協調性、社会性を育てる
カ　直接体験から学ぶ
キ　自己を発見し、余暇活動の楽しみ方を学ぶ
ク　心身をリフレッシュし健康・体力を維持増進する

さて、野外教育にまつわる基本的な事柄に触れてきた。野外教育そのものについて、明確な定義は無く、俗にいうアウトドア・スポーツのような体育的なところから、自然観察など理科の要素まで多様であるということ。しかし、それ故に自然がもたらす有形無形の効果も得られることも明らかになっている。シーズン・スポーツＢにおいてもこれらの効果を期待していることは言うまでもない。

3. 2　野外教育の現状と課題

まずは、報告において野外教育のプログラムの課題について、言及している。学校が実施する野外教育プログラム、地方自治体が実施する野外教育プログラム、青少年教育施設が実施する野外教育プログラム、民間団体が実施する野外教育プログラムが分類され、抽出されている。シーズン・スポーツＢとの関わりで考えると、学校が実施する野外教育プログラムを採り上げる。

学校教育の現場では、「集団宿泊学習、林間学校などの野外教育プログラムが、学校行事の一環として実施され 〜 これらの多くは、通常、１泊か２泊の宿泊を伴い、学年単位で、青年の家・少年自然の家等の施設・設備が比較的整った青少年教育施設等を利用」している。さらに、「昭和59年度から開始した文部省の国庫補助事業である「自然教室推進事業」（５泊６日程度）の創設を契機に、小中学生の長期の野外教育プログラムが、学校において実施」し、比較的長期間の野外教育の機会が設けられた。そして、期間が長く設けられるようになり、単なる一斉指導ではなく「小グループによる選択活動や、個人別の自由選択活動、複数学年が参加し、異なる学年の児童生徒の縦割りグループによる活動など 〜 、理科や社会などの教科との関連に留意し、活動種目によっては、それぞれの教科に位置づけた取り組み」が見られるようになった。そのためにプログラムの内容に多様性が保証された。

しかし、まだ、多くの課題が残されているという。報告では、大まかに四つの問題が提起されている。

一つ目は、「実施期間の短さ」であるとしている。先に触れたように、「自然教室推進事業」により期間が長く設けられるようになったとはいえ、「全国の公立青少年教育施設の宿泊期間別利用者数は、１泊が全体の70％、２泊が全体の約22％で、１〜２泊の利用が全体の９割以上」である。実際には、なかなか長期間のプログラム実施できないという。

二つ目は、「一貫したプログラム作りの欠如」である。「一般的には、子どもたちが喜べば良いとか、単に体験することが大切であるとして、どのような方法でという点が軽視され ～ プログラムが、活動種目の羅列になってしまうのと同時に、実際の指導の場面でも、時間内に次々と活動をこなすことに力が注がれるきらいがある」としている。つまり、野外教育が潜在的にもっている魅力に頼り切っているだけで、教育者側が意図的に何かプログラムを作っていないことを問題視している。

三つ目は、「プログラム開発の不足」である。これは、「野外教育プログラムに対する認識の固定化であり、プログラム開発の不足」の問題である。たとえば、「キャンプ活動は、総合的で最も親しまれている野外教育プログラムであるが、依然として、テントを張り、寝袋で宿泊し、飯盒で自炊することがキャンプであると考えている人々が多い ～ 野外教育プログラムに対するこうした固定観念は、多様なプログラムの開発を阻害」するものであるとしている。

四つ目は、「効果分析・評価研究の不足」であり、「野外教育がどのような成果をもたらすのかといった効果分析やプログラムのねらいが達成できたか、指導方法や内容は適切であったかという評価研究」が行われていないということである。そして、「『感動した』『楽しかった』『自分のためになった』などという感想がよく聞かれ、また、指導者からは、『有意義な活動ができた』『子どもがひとまわり大きくなった』などという感想が多く聞かれ ～ こうした主観的な満足感や経験論的な評価は、野外教育の成果を裏付ける重要な要素の一つであるが、残念ながら、これ以上の効果分析や評価がなれされていないのが一般的」であるとしている。

さて、野外教育の四つの問題を概観してみると、共通して言えるのは、先にも触れたように、野外教育そのものが持つ魅力に甘んじていて良いのか、という点である。このことについては、最後に触れる。

この報告では、野外教育の指導者の問題にも言及している。そして、「野外教育の多くは、非日常的な自然の中で、行動半径の広い活動と１日24時間の生活が伴う　～　青少年の野外教育の指導者は、青少年が楽しめる優れた人間性とともに、様々な役割を担う指導者が数多く必要」としている。その具体的な役割として、「第一に、実施場所の選定、プログラムの作成、人員の配置、広報、会計、渉外、装備や食料の手配など、全体の企画・運営に携わる専門的な能力を有した指導者 ～ 第二に、プログラムの進行や生活面の管理等の役割をしき統括する指導者 ～ 第三に、特定の活動種目を指導するための専門的な知識や技術を持った指導者 ～ 子どもを対象とした野外教育プログラムでは、子どもたちと生活や活動を共にしたり、指導・運営の援助を行ったりするグループリーダー、カウンセラーなどと呼ばれる指導者」があるとしている。このように、野外教育において多様な能力を持つ人材が必要とされているが、現実には人材の養成は大きく遅れているという。そして、シーズン・スポーツＢとの関わりで考えるなら、このような人材の養成の問題を解決する方策として、教員に目を向けている。

野外教育指導者養成という観点から教員、教員養成を考えると「学校の教員は、学校が実施する野外教育プログラムの指導者であり、同時に、野外教育の専門的な指導者となり得る素養を持った人材である。 ～ しかし、～ 教員を目指す大学生や教員自身に、豊富な自然体験や生活体験が不足」していると指摘している。その上で、「野外教育の指導を担う者は、指導者となる以前に、自ら自然体験活動の楽しさや喜びを数多く経験していることが必要 ～ こうした体験があってこそ、その重要性や意義が理解でき、指導者として、青少年にその楽しさや喜びを伝授」することが可能であるとしている。学校での野外教育が多くの子どもにとって、初めての体験となるその場

に立ち会う教員は、非常に重要な役割を担うことになると考えられ、そのための教員は、野外教育にとってとても大切であると考えられる。そして、現在の教員だけではなく、これら教員を目指す大学生の自然体験活動の充実が大切であるとしている。

最後に、野外教育の場として、「野外教育が実施される場合は、国立公園、国定公園、都道府県立自然公園などの豊かな自然が残された地域や、その近隣に設置された青少年教育施設、キャンプ場など ～ この中でも、青少年を対象とした野外教育は、宿泊や活動のための施設設備が整った青少年教育施設・キャンプ場など」で行われることが多いという。しかしながら、野外教育の場には、常に問題点を抱えている。それは、「近年の都市化や過度の森林開発等により、豊かな大自然が減少 ～ 国土の保全、動植物の保護という観点からだけでなく、青少年の野外教育のための場を確保するという観点からも、豊かな自然環境作りに目を向けていくことが必要」であるとしている。特に上記の野外教育の場がある場所は、貴重な自然の中にあることが多い。そして、「自然の中で実施される各種の活動自体が、自然環境を破壊する要因の一つであるという指摘」がある。これは、野外教育が必ず抱えている矛盾である。野外教育のために自然を保全をといいながら、野外教育そのものが自然を壊しているという指摘である。

４．野外教育としてのシーズン・スポーツＢ

野外教育についての「青少年の野外教育の充実について」（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）をシーズン・スポーツＢとの関わりで概観してきた。本章では、先にも少し触れているが、野外教育の問題点とシーズン・スポーツＢが潜在的に抱える問題点を抽出しながら、検討し、今後のシーズン・スポーツＢにいかに野外教育としての要素を組み込むのかを考察する。

まずは、野外教育が抱える潜在的な一番の問題点は、野外教育自体が何なのかということが明確ではないということである。野外で行う教育活動全般について網羅しようとしているが、外延ばかり広がっていき、内包が希薄になっている。そもそも、野外教育は初めから一つの教材として、教科として独立していたというよりもスキー、カヌー等といったアウトドア・スポーツ、生物の要素の詰まった自然観察、環境学習活動、キャンプ、ハイキング、登山等といった野外で行う目的の明確な活動の付加的な産物であったと考えられる。そして、付加的な要素ではあるが、報告でも触れている通り、教育的効果が高いことが認められている。そのため、それぞれの活動から共通の項目として、また、教育効果の部分だけを抽出するような形で野外教育に注目が集まったと考えられる。それゆえに、逆に野外教育そのものを狙いとするような形にすると、総論では何となく何のことを言っているのか理解できるのではあるが、少し深く考えると具体性に乏しくなってしまうと考えられる。

さらに、学習指導要領における「いきる力」の育成も野外教育と同じ構造を持っていると言える。何を対象とした教材なのかは不明確であるが、何か主たる教材をしている時に付加的に要素としては十分にその価値が認められる。そして、野外教育は「いきる力」の育成そのものであると考えられるところもある。つまり、野外教育は、一方で、学習指導要領の指摘する「いきる力」の育成に大いに貢献することがいえる。

シーズン・スポーツＢをこの観点で捉えると教育効果として、野外教育を主として狙うということはせず、これまで通りスキーを滑れるようにという具体的な目標を立て、その付加的な要素とし

て野外教育的な要素、そして、「いきる力」的な要素が入るという関係は良いのではと考える。

さて、このような野外教育の根本的な問題を把握しながら、野外教育としての課題をシーズン・スポーツＢという観点で再度見てみる。注目すべきは、報告に挙げられている四つ目の課題である、「効果分析・評価研究の不足」という部分であると考える。シーズン・スポーツＢでは、実習中に学習ノートを書かせている。スキーという実技科目であるために、その場でメモを取ったりすることが困難である。そこで、毎日の実習の記録を復習させるために、書かせている。その最後に、「この授業で良かった点」「この授業で改善すべき点」について自由記述という形で書いてもらっている。もちろん、授業であり、学生に対する評価はこの実習後にするために、記述内容を素直な評価として受け取ることはできない面もあるが、そのことを差し引いてもある程度素直な意見として受け取ることができるだろう。

その中の代表的な記述を見てみる。2014のシーズン・スポーツＢ（２月19日～22日）の受講者の内、感想を書いた26名。その記述を見ると、好意的な記述が多かった。いくつか、代表的なものを採り上げると「とても楽しかったです。ありがとうございました。初心者がすごく成長できる」（初心者　男）、「初心者でスキー板をつけることも、まっすぐに滑ることができなかった自分が中級者ぐらいに成長できて本当に良かったです。スキーの楽しさも知ることができました。」（初心者　男）、「全くすべれなくて、なにもかも分からなかったところから色々な所をすべれるようになれたので最初と比べるとかなり上達したと思います。また一つスポーツを深く知ることができました」（初心者　女）、「的確なポイントをアドバイスしてくださるのですごく分かりやすかったです。一人一人を見てくれて、個々が変化（動きが）しているのがよく感じされました。四日間でこんなに自分の動きが変わっていたのでおどろきました。そういう点が良かったです」（中級者　女）、というように、スキーの上達が楽しめたという感想です。これは、シーズン・スポーツＢの本来的な目的であるスキー技術の向上が見られことの証であると考える。また、そこには、各教員の努力により楽しんで技術向上がはかれたことも見てとれる。

更に、感想には、特徴的なもう一つの面があった。それを、いくつか採り上げる。「スキーの技術が上がっていることを実感しながら滑れたのは本当に良いことだと思った。また、宿泊したことで普段あまり話さないような人ともたくさん話せたりできて、友達との仲も深まったと思う」（中級者　男）、「全くやったことのない競技にふれて、自分である程度まですべることができるようになったことは何よりも良かった。又、スキーの時間だけではなく、みんなで集まって様々な話をすることができたのがとても良かった。そして、普段なら関わりをもつ機会のない先生方ともかかわれてよかった」（初心者　女）。これらは、スキーの技術向上だけではなく、多くの仲間とコミュニケーションがとれ、人間関係が良くなったことに触れている。他の実技科目とは異なって合宿形式で行われる授業であることもこのような感想が出る大きな要因と考えられる。このことに関連して、感想の改善すべき点について比較的多かった内容が、「自由に、リフトに乗ってすべる時間をナイター以外にも増やしてほしい」（初級者　男）、「昼休みのように、みんなで仲良くすべれる時間をナイターではないときに作った方が良いと思う」（初心者　男）、「ナイター以外でもう少し自由時間があっても良かったと思います」（初級者　男）というものです。シーズン・スポーツＢの全体の日程は、下記の通りです（次頁参照）。

この中で、二日目と三日目にナイターを実施し、ナイターゲレンデをいろいろな仲間と自由に滑走できるようにしてある。そのため、全く自由滑走がないというわけではないが、もう少し、増やしてほしいとの希望が比較的多かった。このことは、班内とは別に、多くの友達とスキーをする時

時　　間	1日目	2日目	3日目	4日目
7：30	7：30埼玉大学出発～11：30宿着予定	朝　　食	朝　　食	朝　　食
9：00～12：00		実技③④	実技⑧⑨	実技⑬⑭
12：00	昼　　食	昼　　食	昼　　食	昼　　食
13：30～16：30	実技①②	実技⑤⑥	実技⑩⑪	14：30宿出発～18：30埼玉大学着予定
18：00	夕　　食	夕　　食	夕　　食	
19：30～20：30		ナイター⑦	ナイター⑫	

間が欲しいと感じている現れである。スキー実習が仲間づくりのツールになっているのである証の一つであると考えられる。

さて、最後にこの感想の中で、野外教育の成果を感じさせる記述も少数ながらあった。それは、「分かりやすい指導によって技術が向上する。他にも遊びが含まれていておもしろいこと」（初級者　男）、「山の中に入って、自然を感じながら滑るということ」（初心者　女）の二つである。後者は、スキーが雪山の中で行うことを素直に実感した感想であり、前者は、その班（筆者の班）で、下記の写真のような簡単な雪上のお茶会、雪遊びをしたことも要因となっているようだ。

また、野外教育の基本である自然を体験するという面で「自分自身のスキーの基本が磨けたこと。色々なコースを滑れたこと。たくさん滑れたこと。」（初級者　女）、「パレレルターン、コブ、ショートターンへの挑戦、確実な技能の向上。新雪、ナイターなどあらゆる状況でのスキーの経験」（初級者　男）という感想もあった。これは、ゲレンデをツアー的に巡ることの可能な広い場所に変えたという効果があった。それによって、雪山の多様な面を体験できたことの証であり、野外教育的な側面が出た感想であると考えられる。

ここで、2014のシーズン・スポーツＢの感想を見てきた。そして、先の報告で触れたように、野外教育の課題である「効果分析・評価研究の不足」のなかで感想が、「楽しかった」等の一般的なことに終始してしまう傾向がシーズン・スポーツＢでも見られた。しかし、これをもってシーズン・スポーツＢの野外教育としての成果が出ていなことになるとは思わない。やはり、野外教育の定義のところでも触れたように、野外教育自体に具体性が伴わないという問題点があり、付加的に野外教育を学ばせるという面を持っていることを考えると、このような一般的な感想が出ることは、良い傾向ではないかと考える。そして、更なる野外教育としての成果を求めるためには、指導者側がスキーとは別の仕掛け（先に出た雪上のお茶会等）をしないと難しいのではないかと考えられる。

報告では、野外教育の課題で指導者の問題があり、教員、将来教員を目指す学生に野外教育を

体験させることの大切さに触れていたが、その点で言うとシーズン・スポーツＢは、十分にその役割を果たしているのではないかと考える。

最後に、野外教育の場としての課題である。シーズン･スポーツＢがスキー技術の向上を目指し、そして、スキー場を使用するということは、野外教育という観点で言うと自然を学ぶために自然に入っているが、スキー場そのものが自然破壊をおこなっているという現実があることを認識する必要があると考える。1998年に行われた長野オリンピックのアルペン競技滑降で問題となったスタート地点の議論は、ゲレンデと自然環境保護、自然破壊の問題を世に知らしめた。つまり、このことはアウトドア・スポーツが抱える矛盾をはらんでおり、常に議論をしていかなければならない問題である。シーズン・スポーツＢを実施する上で、上記のこの矛盾を十分に認識しながらも授業を進める必要があると考える。

５．まとめ

シーズン・スポーツＢを野外教育という観点で見たときに、野外教育が抱える問題と浮き彫りになった。そもそも、一般的に野外教育は、野外で何か明確な課題を持ったプログラムを行うときに、付加的、付随的な効果のあることであり、野外教育そのものを追求することはかなり困難であることが予想される。そのような中で、シーズン・スポーツＢは、スキーを習得させるという一つの大きな課題を設定していることは有意義である。それ故に、感想で「スキー技術が向上して楽しかった」とあるのは、一定の効果があること証である。さらに、仲間との関係が深まった、また、自然を感じられた、ゲレンデを多く巡れたとあるのは、付加的な野外教育の効果の現れであるともとれる。その意味では、シーズン・スポーツＢは、野外教育という観点も付加的に網羅している。

しかし、教員養成に必要な資質として、野外教育を体験しているのかということに関しては、まだ、不十分である。特に、「いきる力」等の問題解決に大きく寄与する可能性を秘めていることを考えると、野外教育の持つ効果に再度目を向ける必要があると考えられる。今後、どのような小学校教員、保健体育教員を養成したいのかということとも関係して、本論で触れたことを十分に考慮しなければならない。

参考・引用文献

公益財団法人　全日本スキー連盟 著「教育本部　スキー指導と検定　2014年度版」 スキージャーナル株式会社　2013

文部科学省「青少年の野外教育の充実について」（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）

平成８年７月24日　青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議

（2014年３月31日提出）

（2014年４月18日受理）

The meaning practice ski training named Season Sport B in connection with Outdoor education

MATSUMOTO Shin
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The essay was stated the meaning practice ski training named Season Sport B. Skiing was outdoor sport and was included in elements of Outdoor education. Outdoor education haven't been defined until now. Because this general idea has been made by by-product worked by outdoor sports and activities. But we have known the effects of outdoor education had been made by outdoor sports and activities. These effects have been hoped by teaching a class in Season Sport B because skiing have been outdoor sports. In fact students have stated positive feelings after had participated in Season Sport B. We should have satisfied these effects.

Key Words: Outdoor education, skiing,